

# 平成16年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

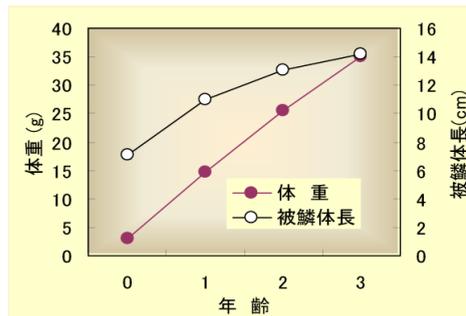
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 3歳  
成熟開始年齢: 満1歳  
産卵期・産卵場: 冬季を除くほぼ周年で早春～夏季が盛期、沿岸～沖合の広い海域  
索餌期・索餌場: 周年、九州～北海道の太平洋沿岸、黒潮域、黒潮続流域、黒潮親潮移行域、親潮域、東は経度180度附近の海域まで  
食性: 動物プランクトン等  
捕食者: 中大型の浮魚類、鯨類

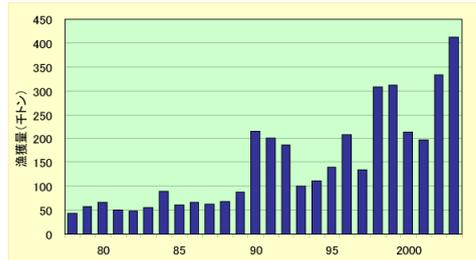


## 漁業の特徴

漁場の中心は常磐～房総の沿岸で、黒潮・親潮移行域に分布する魚群は漁獲していない。しらす船びき網の漁獲物の大半は本種の仔魚であるが、分布域に対して漁場が極めて狭いため、この漁業が資源に与える影響は大きくない。最近の漁獲割合は20%前後で推移している。狭い漁場内では高い漁獲圧がかかっているものの、系群全体への影響は大きくないと考えられる。

## 漁獲の動向

1989年まで数万トンで推移していた。1990年にそれまで少なかった太平洋北区で急増して20万トンを超え、1992年まで15万トン以上で推移した。1993年は10万トンに急減した後増加に転じ、1996年は再び20万トンに達した。1997年は13万トンに減少したが、1998、1999の両年は30万トンを超えた。2000年、2001年はやや減少して21万トン、20万トンとなった。2002年は再び30万トンを超え、2003年は40万トンを超えた。

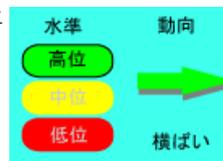


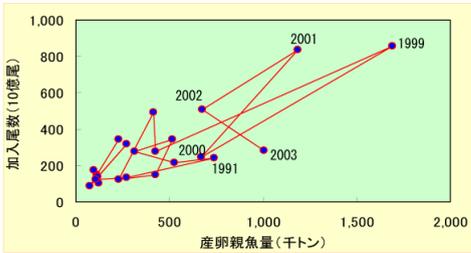
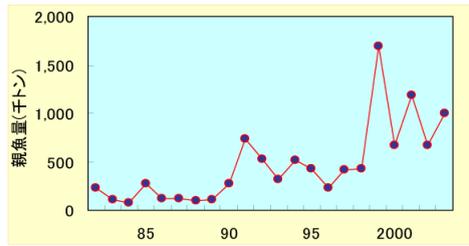
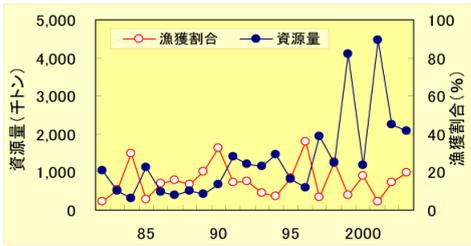
## 資源評価法

分布域は広いにもかかわらず漁場は沿岸域に限られているが、本系群の回遊経路から考えると漁場内外における資源の十分な交流が仮定できるため、年齢別漁獲尾数に基づくコホート解析による資源量推定を基本とした。参考のため、漁場域よりも更に広範囲で行われている産卵調査結果を基に、卵数法により親魚量を計算し、コホート解析により求めた年齢組成から卵数法による親魚量を引き延ばして資源量を推定し、両者を比較検討した。

## 資源状態

コホート解析による推定資源量は、1988年から増加傾向となり、1991年は140万トン近くに達した。その後、1995～1996年は減少したが、1997年に194万トンと増加し、1999年と2001年は400万トンを超えた。2002～2003年は200万トンを上回る高水準である。一方、卵数法により計算した親魚量は1991年に急増し、その後やや減少したが、1999年以降は高水準となっている。これに未成魚量を加えた総資源量は、1991年以降は50万トンを上回り、1999年には急増して400万トンとなった。2000年は激減したが、2002～2003年は200万トンを上回る。両者の解析結果を比較してみると、変動傾向や資源量推定値が同様の値を示していた。





**管理方策**

現状をある程度超えて漁獲しても資源に悪影響を与えることはないと考えられるため、2004年と同レベルの親魚量を維持できる漁獲係数をFsimとして生物学的許容漁獲量の上限値(ABClimit)を求め、目標値(ABCtarget)は現状を超えない漁獲割合に対応する漁獲係数を基に設定した。

	2005年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	364千トン	Fsim	3.9	19.3%
ABCtarget	332千トン	0.62Fsim	2.4	17.6%

F値は産卵親魚の主群となる1歳魚  
 漁獲割合=ABC/資源重量  
 資源量は1月の値

**資源評価のまとめ**

- 魚群は漁場外の相当沖合の広い海域に分布しており、現状をある程度超えて漁獲しても資源に悪影響を与えることはない
- 資源は高水準、横ばいで、漁獲が悪影響を与えていることはない
- しらす漁業が資源に与える影響は小さい

**管理方策のまとめ**

- 現状をある程度超えて漁獲しても問題はない

資源評価は毎年更新されます。